

令和3年度臨床リウマチ学会誌注目すべき論文

松野博明

臨床リウマチ（日本臨床リウマチ学会雑誌）別刷

令和4年3月発行

Vol.34/No.1

誌 説

令和3年度臨床リウマチ学会誌注目すべき論文

松野リウマチ整形外科
日本臨床リウマチ学会誌編集委員長
松野 博 明

はじめに

令和3年度優秀論文賞は今年も本誌編集委員先生方による厳正なる審査が行われました。その結果、北海道内科リウマチ科病院の高松尚徳先生による“関節リウマチ患者に対しSARAHを用いた手指機能訓練と関節滑膜血流に与える影響”と富山大学看護部の高邑小百合先生による“関節リウマチ外来患者の満足度と関連因子”の2論文が受賞され、富山で私が開催させていただいた第36回臨床リウマチ学会において本学会理事長である田中栄先生より表彰状と副賞が贈られました。誠にめでたうございます。また両先生にはこれからも本誌発展のため引き続きご尽力頂ければ幸甚と考えております。現在本誌には多数の論文が投稿されるようになっており、これにともない論文の査読件数も増えています。編集委員の先生方はじめその要請をうけ査読して頂いた先生方にはこの場を借りて心より御礼申し上げます。また年間の最多となる論文査読を頂いた先生に送られる優秀論文査読者賞は豊橋市民病院リウマチ科の平野裕司先生が受賞され、田中栄理事長より同じく感謝状と副賞が贈られました。ご多忙の日常診療の中、査読のお仕事、誠に有り難うございました。またこれからも引き続き宜しくお願い申し上げます。

優秀論文賞

本年も1年の総括として注目すべき論文の要旨を報告させて頂くことにしました。例年にならない先ず優秀論文賞を受賞された2論文を紹介させて頂くとともに、残念ながら今回の選には漏れましたが注目された臨床的示唆に富んでいると筆者が感じた幾つかのその他の論文も紹介させて頂くことにしました。論文内容に興味を持たれた先生は是非、本誌の本論文を参照頂きたいと思います。また現在本誌の採択率は約7割であり掲載された論文はいずれも価値ある研究論文ではありますが、誌面の掲載スペースの関係上紹介は一部の論文にとどまることをあらかじめお詫び申し上げます。

高松尚徳先生の論文(臨床リウマチ 32 (2), 161-8, 2020)では、英国で開発された手指の機能訓練 Strengthening And stretching for Rheumatoid Arthritis of the Hand (SARAH) (Lamb SE. et al. Lancet 385, 421-9, 2015) を用いてRA患者の手指の機能訓練の有用性を評価するとともに、機能訓練による機械的ストレスによって関節滑膜炎の増悪がないかを関節エコーによる滑膜血流を検査することで評価されました。その結果、SARAHによりRA患者の手指機能の向上は認められましたが、懸念された関節滑膜炎の増悪は認められずSARAHによる機能訓練はRA患者にとって有用な手法であ

Notable articles of the Journal of Clinical Rheumatology in 2021

Hiroaki Matsuno.

Matsuno Clinic for rheumatic diseases

Editorial Committee Chairman of the journal of clinical rheumatology and related research

DOI: 10.14961/cra.34.1

ることを証明されました。

高邑小百合先生の論文（臨床リウマチ 32(1), 21-9, 2020）では、米国で開発された満足度アンケート Leeds Satisfaction Questionnaire (LSQ) (Hill J. et al. Ann Rheum Dis 51(2), 195-7, 1992) と南カルフォルニア医大で作られた疾患活動性の質問票 RAPID3 (Routine Assessment of Patient Index Data 3) (Pincus T. et al. J Rheumatol 35(11), 2136-47, 2008) を用いて外来通院中の RA 患者の満足度を調査されました。その結果、大学病院に通院中の RA 患者は医療の質と能力について高い満足度を示しましたが、患者への共感や、患者に対しての態度については低いことが明らかにされました。その理由として待ち時間、家族への関心、患者の治療選択に関する意見の傾聴が問題であることも示されました。また高年齢、短い罹病期間、患者の全般評価が低い場合には満足度が高くなることも明らかにされました。これらのことから RA 外来における改善点を看護師の立場から考察された非常に有意義な論文であると思われました。

その他の注目すべき論文

臨床リウマチ学会は医師、看護師、薬剤師、理学療法士、作業療法士、製薬企業の方々等の RA 診療や治療に関わる全ての領域の幅広い層に開かれた学会であり、毎年多くの異職種の研究の先生方の参加も頂いています。今回の中で看護師の高邑小百合先生が優秀論文賞を受賞されたことは意義深いことであつたと思います。医師以外の先生から投稿された論文の中にも興味深い報告が多く、本学会ならではのユニークな一面ではないかと感じています。

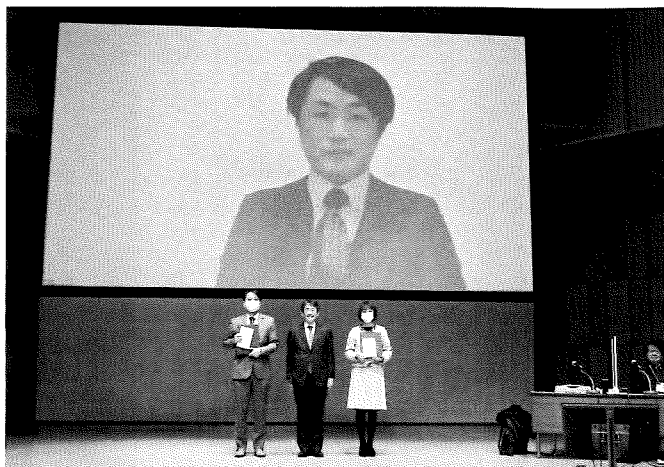
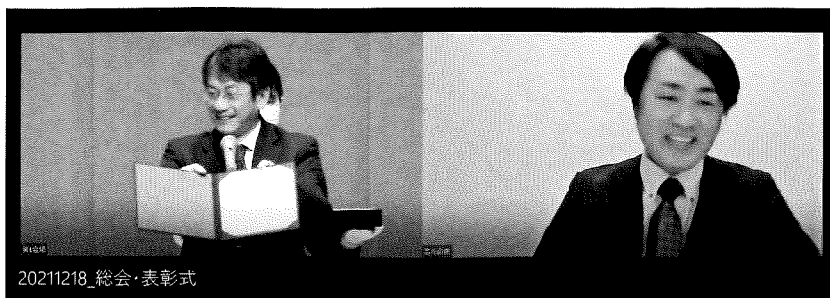
児島由紀子先生により紹介された“リウマチ科以外の診療科へ入院した関節リウマチの把握と介入への取り組み（臨床リウマチ 32(3), 220-7, 2020）”では作業療法士の立場からリウマチ科以外に入院し、リハビリ科に紹介された RA 患者に対する取り組みや、チーム医療の大切さを調査された総合病院ならではの報告で興味深いものであつたと思います。今後はますます様々な職種の先生方からの論文が投稿される

ことを期待しています。

針金健吾先生の“関節リウマチに対するゴリムマブの開始用量別臨床効果の検討（臨床リウマチ 32(1), 48-56, 2020）”では、日常診療において2つの承認用量があるためしばしば治療方針に迷うことのあるゴリムマブの用量選定の臨床的疑問について、高疾患活動性の症例では最初から高用量を選択し、その後減量する治療方針が有益であることを証明されています。

房間美恵先生の“関節リウマチと共に生きてきた人の痛みの軌跡（臨床リウマチ 32(2), 132-9, 2020）”では保健学博士としての先生のお立場から意見をのべられています。患者のアウトカム改善に最も効果的であるとされる目標達成に向けた治療（Treat to Target; T2T）を遂行する上で、患者の心理面や生活面を含めた支援は必要であるが、そのためには慢性疼痛を抱える RA 患者の場合一人一人のライフストーリーを辿りながら概念モデルとしての痛みの軌跡（illness trajectory）（Corbin JM. Nurs Pract 12, 33-41, 1998）を治療に取り入れることが患者との共同意思決定をなすためには重要であることを先生の長時間に及ぶ半構成的面接から明らかにされました。

手前味噌で恐縮ではありますが、私の“関節リウマチ患者におけるエタネルセプトバイオシミラーから別のバイオシミラーに切り替えた場合の有効性と安全性（臨床リウマチ 32(3), 245-50, 2020）”は、これまで先行品からバイオシミラー（BS）に変更した場合の有効性や安全性について検討した論文はありましたが、BS から同種他社の BS に切り替えた研究は世界的にもなかったことから調査してみました。この結果は今後 BS が普及するにつれ薬価や安定供給不足等により現実問題として同種他社の BS への変更を余儀なくされるかもしれない懸念があることを考えると意義があるのではないかと考えています。今回の検討で BS 切り替えによる有効性に問題はありませんでした。有害事象に違いがあることがわかりました。BS の切り替えにはある程度の注意を要することが判明したことは意義があるものと考えています。



授賞式の様子



吉井一郎先生の“投与開始前検査にてT-SPOT陰性であったにもかかわらず、パリシチニブ投与後肺結核を発症した関節リウマチの1例（臨床リウマチ 32(4), 269-74, 2020)”は1例報告ではありますが、生物学的製剤と比べ結核の発症が少ないとされているJAK阻害薬においてこのような有害事象を発症した場合の経過を知ることが出来るきわめて貴重な症例報告と思われます。今後も多くの先生からの本誌への貴重な症例報告の投稿も待たれるところです。

さいごに

今年も多くの先生方から数多くの玉稿を賜り本誌のレベルも年毎確実にアップしていること編集委員一同たいへん嬉しく思っています。今後も本誌の格調を高めるべく努力してまいりますので先生方におかれましても引き続き多数の

投稿宜しくお願い申し上げます。

臨床リウマチ学会誌編集委員

松野博明（編集委員長）、亀田秀人（東邦大学医学部内科学分野膠原病学）、菅野祐幸（信州大学医学部病理組織学）、佐藤慎二（東海大学医学部内科学系リウマチ内科学）、田中栄（東京大学医学部整形外科）、中島亜矢子（三重大学病院リウマチ・膠原病センター）、中原英子（大阪行岡医療大学 医療学部・行岡病院内科）、西田圭一郎（岡山大学整形外科）藤尾圭志（東京大学医学部アレルギー・リウマチ内科）、堀内孝彦（九州大学病院別府病院免疫・血液・代謝内科）、松下功（金沢医科大学リハビリテーション医学科）、森雅亮（東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科生涯免疫難病学）、アイウエオ順、敬称略